

称号及び氏名 博士（人間科学） 高橋 幸治

学位授与の日付 平成23年7月28日

論文名 心理療法における“境界線”にまつわる研究

論文審査委員 主査 川原 稔久

副査 牧岡 省吾

副査 総田 純次

副査 橋本 朋広

副査 山中 康裕（浜松大学大学院教授）

論文要旨

本論文は、ものや現象に対する時、個人が引く境界線に着目した臨床心理学的研究である。序章では、その“境界線”について意味するところを説明した。第2節において、**G. Simmel**（ゲオルク・ジンメル）の『橋と扉』から、彼が人間の本質として捉えた、“無限の空間から境界線（小屋）を設けて有限な意味体系を作り、同時に扉によって無限の世界へも眼を向ける”という心のあり方について説明した。自然界のありようを「分かれている」とか、「結合している」とみなすのは、人間特有の認識に由来していて、無限の空間から有限な一区画を切り取りつつ、そこから自由になる可能性をもまた潜在している人間の本質に**Simmel**は着眼したのである。ある意味体系を設けることで安定を生み出すことができるが、それと同時に扉を開き、意味体系の及ばない世界に出ていき無限の可能性を求めることもできるわけである。**Simmel**は、人間が住む有限の世界は常にどこかで物理的にも形而上学的にも存在の無限性と境を接している、と述べている。第3節では、本研究における“境界線”の範囲として、言葉や意識の発達で囲われる境界線、自と他の境界線、意識と無意識の境界線、心理療法家がクライアントを理解する際の境界線、境界線によって生まれる

排除の現象などについて説明した。第4節では、臨床心理学や精神医学でなされてきた境界例研究を概観し、そこで問題とされてきた境界概念に着目した。第5節において、本研究の目的を示した。**Simmel**の言う人間の本質を底に見ながら、心理療法の中で起こっていることを考察し、“境界線”という切り口によって新たな知見を獲得することが本研究の目的である。

第1章「心理臨床における因果律と非因果律」では、筆者が10年以上前に取り組んだスポーツ領域での研究と心理臨床実践を取り上げ、それらの反省的考察を行うことから得た知見を論じた。第1節では、まず昨今の臨床心理学で盛んな動きである説明責任を重視したエビデンス・ベーストアプローチについてその特徴を概観した。第2節では、以降で取りあげるスポーツ領域における心理臨床の歴史について触れた。第3節では、「柔道競技者の実力発揮に及ぼす認知及び対処過程の影響」と題したストレスモデルの検証を目的とした研究を紹介し、再考察を行った。柔道競技者の試合における心の状態とそれによって実力発揮がどのように影響するかを明らかにすることが目的であった。しかし、認知的評価、問題中心対処、情動中心対処などの整理された概念と図式的に方向性のあるモデルが研究者の根本に存在し、それに無自覚的に縛られている様子を認めることができた。現象を理解する足がかりとしての研究モデルの設定が、それに当てはまらない現象を無視する働きがあるという危険性があることが示された。第4節では、メンタルトレーニングを通しての選手との心理臨床実践活動を事例研究として提示し、再考察を行った。実践していた当時のセラピストは因果律が考えの基礎にあり、それにより見落としている問題を確認することができた。第3節と第4節の反省的考察から、心理療法でのクライアントの表現の受け取り方についての知見を得ることができたので、それについて第5節で説明を行った。木村敏のものごとの視点と**Jung**のイメージの考え方を援用して、クライアントの表現を受け取る際には、セラピスト側には、二つの方向によって分けられる捉え方があることを図示した。表現を一つの意味に限定していこうとする方向と、多義的に捉え布置を読むことを目指した方向である。セラピスト側の捉え方によって、クライアントに大きく影響を与えることに言及した。

第2章「身体についての語りを超える“境界線”－競技の話イメージ表現媒体として扱った心理療法過程－」では、対人関係のことを主訴に來談した**E**さんとの面接過程を提示し事例研究を行った。面接では、はじめさまざまな訴えがぐるぐると同じところを回るように繰り返された。ある回で、風景構成法（**LMT**）を行った。そこでのやり取りは、**E**さ

んのイメージを活性化させ、長く継続していた競技の語りに自然に移っていった。筆者(Th)は、それ以後競技の話には、Eさんのイメージ表現が現れていることを実感することができ、競技の現実の具体的な語りを聴きながら、Eさんが内的に体験し実現していることを連想していた。そして、Eさんは、競技での発見と実現を通して、当初の対人関係の問題を克服していった。考察では、まずLMTと競技の話が転換点であり、そこから訴えが語りが変わっていたことについて述べた。次に、競技の話イメージ表現媒体として扱うことができたことの意義について考えた。クライアントは自身の主体に関わる問題は、何かの鏡に映し出すことで、つまり媒体があることで、自身の体験として向き合うことができる。競技の話クライアントの内的なイメージの表現として捉えることで、それが可能になったわけである。さらに、前章のセラピストの下方向の聴き方、つまり多義的に布置を読む態度に説明をつけ加えた。クライアントの訴えを一つの意味で一対一対応の関係でセラピストが捉えるとクライアントに対して、ある程度安定する作用を生む。一方、セラピストの多義的な布置を読むような聴き方は、クライアントの投げかけた訴えがクライアントの思惑とは異なるポジションで受け取られることになり、「あれっ？」という不確定感を生むことにつながる。それが、クライアントの内的作業を引き起こすきっかけとなるのではないか、と考察した。

第3章『「免疫の知」と心理療法』では、まず免疫学者の多田富雄のアレルギー反応にまつわる自己と非自己についての主張を取りあげた。そして、第2節で、アレルギー反応の現象に普遍的なテーマが潜んでいることを指摘した。第3節以降では、アレルギー反応を免疫学が細胞レベルで解明しているその様子を人間の普遍的レベルに近いイメージ表現として捉え、その異物、自己の非自己化、排除、寛容が織り成すテーマが心理療法でどのように展開していくかを探ることを目的とし、事例研究を行った。学校臨床現場でのJ先生との面接である。J先生は、M子とL雄という二人の生徒のことで来談した。第3節の後半で事例についての考察を行い、第4節で「免疫の知」との接点からの考察を行った。免疫も本事例もその舞台は脳ではなく身体が大きく影響する所で展開していた。M子のリストカットやエスケープの様子やL雄の周囲への暴言、攻撃を彼ら自身が行っていた自己の非自己化の観点や周囲からの排除の観点から考察を行った。M子は転校をせまられていたし、L雄の問題は、腫れ物に触るかのような扱いを周囲から受けていた。心理療法は、J先生自身からも見捨てられそうになったJ先生自身の中に潜む部分につき添う仕事をしたと考えられる。J先生は、様々な排除の現象を包含していく。J先生の内的なプロセスとM

子や L 雄、教室での動きが呼応して展開していった面接過程であった。その様子は、多田の述べる「超（スーパー）システム」が、J 先生のクラスや学校全体において成立し機能していく様に見ることもできた。最後に、制度、マニュアルの害と心理療法との相補的關係について言及した。

第4章「異質なるものをめぐる心理療法—アルコール依存の男性との面接過程—」では、アルコール依存の男性との面接過程について事例研究を行った。クライアントの S さんは、排除された存在であった。アルコール依存の患者としてだけでなく、近代農業の規格化にそぐわないために取り残されていた。そして、自分自身でも、自然とのつながり、野生的なものには蓋をし、閉じこもっていた。心理療法の中で、S さんの耳と扉をめぐる機会が訪れる。扉が開くことによって、大自然の理の世界が展開する。それは S さんの先人から受け継いできた米作りの語りによって、表現されていった。近代化では到底実現できない、知恵についての語りであった。S さん自身の自我もそのことに価値を見出し、先人の叡智の体現者として変わっていく。考察では、これらの点と、自我と自然の交互の作用について、酒と心理療法の意義などについて検討を行った。

第5章では、総合考察を行った。第1節では、漠とした世界に直面した時、人がある意味体系によって捉える、つまり小屋という境界線で捉えること、それに縛られることについて心のエネルギーの節約という側面から述べた。またその意味体系を超える、つまり小屋の扉を開くセラピストの動きについて、意義や可能性について言及した。第2節では、イメージのもつ意識と無意識の境界を超える働きについて各章の事例研究を例に挙げ説明した。第3節では、境界線上で起こることや、そこで問題視して立ち止まることの意義について述べた。その境界上では問題やアレルギーが生じるわけだが、そこを問題にすることによって、新たな可能性が開かれることにつながる。第4節では、秩序による一方的な勝利が招くことについてまとめ、排除に対する反逆の視点の重要性とその可能性についてまとめた。最後に第5節で、人は皆、それぞれ寛容なところ、排除したくなるところ、扉が開いているところが異なる存在であり、そのようなクライアントに対して器を作り、クライアントをつつむ外的なものも内的なものも含めた全てがスーパーシステムとして機能してくるのを待つことが心理療法の目指すことであるということについて述べた。

学位論文審査結果の要旨

本学位論文審査委員会は、人間社会学研究科人間科学専攻の博士論文審査基準に照らして厳正な審査を行い、以下の評価と結論に至った。

(1) 研究テーマが絞り込まれている。

本論文は、心理療法における認識の境界線を明らかにし、境界線の扉を開き可能な限り全体を配慮する心理療法が心の変容を可能にすることを示す試みである。序章では本論文の対象となる境界線を総覧し、各章では研究テーマが心理療法における境界線に一貫して絞り込まれている。第1章では意識や言葉が発達するにつれて因果的に引かれる境界線、第2章では言葉と内的イメージの境界線、第3章では自他の境界線および秩序と秩序から排除されたものの境界線、第4章では近代意識と無意識および自然との境界線をテーマとしている。

(2) 論文の方法論が明確である。

本論文の方法は、心理療法におけるセラピストの経験を示し、そこで表現された問題とセラピストの理解、介入および事例経過を分析し、事例構造と心の変容の機序を検討する事例研究法である。第1章ではストレス・モデルが依拠する因果論がメンタル・トレーニング事例での限界であることを示し、第2章では身体の語りを内的なイメージとして聴くことに心の変容の契機を見出している。第3章では秩序を破壊する動きに対して、身体を舞台に自他の境界線の扉を開く視点を持つことが、集合的な変容を実現すると捉えている。第4章では意識から排除されている無意識および自然との交流を可能にする視点を事例経過の分析から見出している。このように認識の境界線は事例の力動に関与するため、本研究は一貫して事例研究の方法をとっており、方法論は明確であり研究テーマに有効であると評価できる。

(3) 研究テーマについての先行研究の調査を十分に行っている。

本論文は、その研究テーマである心理療法における境界線に関して、以下のよう
に、先行研究の調査を十分に行っていると認められる。序章では哲学者 **Simmel,G.**
による認識の境界線の視点を手掛かりに、本論文が対象とする境界線を、**Freud,S.**
および **Jung,C.G.**の無意識概念、分析心理学における **Neumann,E.**の意識発達論、
精神分析学の自我境界論、治療精神医学の境界伝達の議論、民俗学の境界論および
異人論等各観点から広く検討している。また精神病理学の領域で **1920～1990** 年代

になされた「境界例」概念の議論 (Knight, R., Hoch, P. & Polatin, P., Grinker, R.R., Kernberg, O.F., Gunderson, J.G.等) を踏まえて、精神分析学、分析心理学、心身医学の議論を検討している。第1章では認知行動療法と、Martens, R. 中込四郎を中心としたスポーツ競技者への心理学的アプローチの歴史 (Loehr, J.E. Suinn, R.M. 中島登代子、鈴木壮等) を振り返り、Lazarus, R.S.を中心としたストレス・モデル (Folkman, S., Smith, R.E., Passer, M.W., Horn, T., Lewthwaite, R., Scanlan, T.K 等) と Spielberger, C.D., Martens, R. の不安理論に依拠した研究の因果的説明を批判し、言葉が抱える事態とイメージについて、哲学的精神病理学の木村敏による「ことともの」の差異に関する議論、Jung, C.G.と河合隼雄のイメージ論を取り上げる。第2章では分析心理学の象徴論を踏まえ、身体と無意識の関係について山中康裕、岸本寛史らの「無意識的身体像」概念を検討している。第3章では免疫学者多田富雄の「免疫の知」の視点を手掛かりに、秩序や自他の境界線から多様性に関われることに関して議論し、第4章と第5章では境界線にある扉の意義に関連して赤坂憲雄の異人論、Simmel, G.による「扉」の視点を取り上げている。

(4) 研究の素材となる基本文献、資料、調査データを十分に吟味している。

本論文は心理療法における境界線を研究テーマとしており、その研究素材の中心は心理療法事例での経験である。各章で取り上げられる事例は著者の自験例である。事例の経過に添って各面接セッションの詳細な逐語録が提示され、論証の根拠となる事実を緻密に吟味していることが認められる。また著者は、長年の心理療法の経験から自らの認識の軌跡を批判的に取り扱い、記述の仕方も自らの認識の境界線を自覚してなされ十分に吟味されている。さらに 各章の事例それぞれは、病態水準の各カテゴリ (健康な水準、神経症水準、境界例水準、心身症水準) にわたっており、心理療法における経験一般の幅を十分覆いうるデータとなっている。

(5) 研究テーマについて、先行研究にはない新しい知見を打ち出している。

本論文の新しい知見は、心理療法におけるセラピストの聴き方、意味付け方を詳細な逐語録で示し、心理療法の境界線と変容可能性を事例から示したことである。

1. セラピストの認識が備える境界線を示し、語りをイメージで捉え境界線の扉を開く視点を持つことで生じる心の動きを具体的に示したこと。2. セラピストが境界の扉を開く視点を持つことで、心の動きは語りの字義通りの意味を超え、身体や自然のイメージを介して、心の多様性を実現する変容につながることを示したこと。

3. そうした身体や自然のイメージを扱うセラピストの聴き方、意味付け方を具体的に示したこと。これらは先行研究にはない新しい知見であると認められる。

(6) その知見を裏付けるための、必要にして十分な議論と実証が展開されている。

本論文の議論と実証は、明確で着実な変容を示した各事例を根拠に病態水準に応じて順次展開されており、極めて説得力があり必要にして十分と認められる。第1章では因果律モデルに依拠したメンタル・トレーニング事例について、その一義的理解の限界を議論し、言葉の背後に布置される多様な意義を聴く必要が説かれている。第2章では対人関係の問題に対して主体的な関わりを実現した大学生の事例から、身体の語りを内的イメージとして多義的に聞くことを議論し、心の動き全体を実現する聞き方を示している。第3章では、自己破壊的行動化を呈した生徒たちを内的にも関係性においても抱え、生徒や教員の人格変容に加え組織の集成的変容をも実現した教員の事例について、自他や秩序の境界線が持つ破壊性を議論し、境界線の扉を排除された自己破壊的な動きも含めた多様性に向けて開くことが、秩序の変容を導くことを示している。第4章では、近代化された農業からも家族関係からも排除された高齢者が自然との交流と伝統的な生き方の異質さを引き受け生き直した事例について、近代意識にとって異質な無意識や自然との境界線を議論し、異質なものに開かれたセラピストの意識のあり方を示している。第5章の総合考察では、セラピストのあり方および心理療法における境界線を議論し、境界にあることが存在全体を可能な限り配慮することにつながると、結論している。

(7) 当該分野の研究領域に新たな地平を切り開く、独創性を備えた論文である。

臨床心理学分野では近年客観テストや認知行動主義を代表とした因果論に依拠した理論が注目されつつあるが、本論文はそうした理論の限界と危険性を明確にしている点で現代的意義が大きい。また **Freud,S.**による無意識概念以来力動的な立場から心理療法の目標は意識による洞察、心理化であるとの考え方が中心となってきたが、本論文はそれとは異なる全体的な治癒の実現を示し得ている点で、独創的であり、心理療法論という研究領域に新たな地平を切り開くものである。

以上の評価を踏まえ、本学位論文審査委員会は本論文を博士（人間科学）の学位に値するものと判断する。